

# モモの安定経営対策

那賀振興局

指導対象：JA紀の里桃部会、あら川の桃振興協議会

## 1. 取組の背景

那賀地域は県内一の桃産地であり、特に「あら川の桃」というブランド名は京阪神に広く浸透している。

しかし、近年は収穫までに強風雨にさらされる事が多く、発芽前の温暖な気候もあり、せん孔細菌病の多発や、温暖な気候によりカイガラムシ類の発生時期がずれ、多発を招くなどの問題がある。更に平成29年にかつらぎ町にて発見された特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の侵入も懸念される。

そこで振興局では、せん孔細菌病の対策試験や、カイガラムシ類の発生時期の予測、「クビアカツヤカミキリ」の侵入・拡散防止に向けた取組を行う。

## 2. 活動内容（詳細）

### (1) モモせん孔細菌病対策試験

- ・発生園1園地で、通常防除に展着剤アビオンE1,000倍液を加用し、抑制効果の検討を行った。
- ・同圃場にて秋期のボルドー剤散布が次年度のせん孔細菌病の発生に与える影響について処理を行った（調査はH31.4予定）。



写真1 せん孔細菌病現地調査

### (2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

現地にカイガラムシの発生状況について、調査園を3地点(桃山町2ヶ所、粉川町1所)設置し、発生時期の予測を行った。

### (3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

将来的に那賀管内に侵入が想定される「クビアカツヤカミキリ」を監視する。

## 3. 具体的な成果(詳細)

### (1) モモせん孔細菌病対策試験

アビオンE加用によるせん孔細菌病抑制効果は、対象区、処理区ともにせん孔細菌病が多発し、効果が判然としなかった。

多発時に各種殺菌剤(銅剤、抗生物質)の効果が低下する事は周知である。物理的にパラフィン剤などの被覆による防除効果による抑制を狙った試験であったが、農薬と同様の結果になったと考えられる。(表1アビオンE試験結果)。

表1 アビオンE散布によるせん孔細菌病抑制効果

調査日	ネオエステリン			アビオン1,500倍			アビオン1,000倍		
	秀	優	外	秀	優	外	秀	優	外
全体	39.7	41.0	19.3	43.0	36.4	20.6	53.2	36.4	10.4

※秀 果実にせん孔細菌病による斑点が無い  
優 斑点の数が1～10確認されるもの  
良 斑点の数が11以上のもの

## (2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

積算温度によるモモ害虫のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）の幼虫発生時期について、現地での調査を行った。

表2 カイガラムシ類発生状況(幼虫数:3cm<sup>2</sup>/1日)

調査日	5月3日	5月11日	6月7日	7月6日	7月11日	7月20日	7月27日	8月3日
桃山町元	23	8	1	0	0	0	0	0
荒見	15	2	81	99	51	60	84	55

※5/3、5/11の個体は幼虫の形態からウメシロカイガラムシ(クワシロの可能性あり)。以降の幼虫はナシマルカイガラムシ。幼虫の発生時期は5/1日、7/11日、9/6日(台風の影響にて調査断念)。

J P P ネットの有効積算温度計算シミュレーターを用いて計算した予測日と両面テープトラップによる実測から、シミュレーターにより薬剤散布適期を予測できる可能性が示唆された。

## (3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

平成29年にかつらぎ町で和歌山県において初めて「クビアカツヤカミキリ」の侵入が確認された。近隣発生地の大阪府において、被害が拡大を続けている現状、将来的に那賀管内へ生息域が拡大する事が想定され、更に徳島県の事例(発見時に高密度で産地に定着)のように、発見の遅れがあった場合、県内一の桃産地を形成する地域農業の根幹に大きな影響を与える事が想定される。

この驚異に対し、那賀地方病虫害防除対策協議会(J A 紀の里、紀の川市、岩出市、和歌山県北部共済、和歌山県農業協同組合連合会、かき・もも研究所、那賀振興局農林水産振興部)にて既に調査を行っている4ヶ所(かき・もも研究所調査)に加え、約20地点の定点を設置し、監視体制を構築する事となった。

## 4. 農家等からの評価・コメント

(1) 桃栽培農家K氏(実証園設置農家):せん孔細菌病対策の根絶は産地が切望する課題である。本年の結果については残念だったが、今後とも生産者、J A 紀の里、かき・もも研究所、振興局など協力して対策を検討してほしい。

(2) 桃栽培農家Y氏(調査圃設置農家):産地でカイガラムシ類(ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ)が各圃場で見られるようになって、本技術の必要性はより大きくなってきたように思う。予測日に誤差があったとしても次年度は産地に予測日の情報を出して欲しい。産地には色々な条件の圃場があり、補正を研究所や振興局職員だけで行うのは困難だと考える。協力できる所は産地も協力したい。

(3) J A 紀の里指導員N氏:「クビアカツヤカミキリ」に関しては徳島や栃木の被害地から状況は一部聞いている。管内の桃産地に定着を許した場合、産地維持が困難になる可能性もある事から重要な取組だと考える。協力は惜しまないので監視体制はしっかりしたものを構築して欲しい。

## 5. 普及指導員のコメント(那賀振興局農業振興課・主査・北原伸浩)

(1) モモせん孔細菌病の対策に関しては、全国の主産地で取組がされている所であるが、かき・もも研究所と連携し、産地において被害軽減につとめたい。また依然として、発芽前防除に対して消極的な生産者も一部にいる事から、今後も耕種的対策と合わせた防除の徹底は重要である事を産地に啓発していく。

(2) カイガラムシ類の予測技術に関しては、高齢化し、幼虫の確認などが難しくなっている生産者もいる中で、精度を上げ、防除効果が少しでも高くなるように、予測日と現地圃場での差を埋める作業が必要だと考える。産地と協力し、安定生産に役立てる予測技術の確立に努めたい。

(3) 「クビアカツヤカミキリ」に関しては、未だ和歌山県内にて定着が確認されていないため、関係機関の担当の中に重要害虫であると認識できていない者もいた。今年は発生県である大阪府の協力でJAの地域担当や市役所職員とともに研修を行った事で、産地を守るためにも監視体制の構築は重要な業務であるとの共通認識は得られたと考えられる。

## 6. 現状・今後の展開等

(1) モモせん孔細菌病対策：現行の防除暦の見直し、秋期防除の徹底による春型感染枝(スプリングキャンカ)抑制に向けた取組等を行う。

(2) カイガラムシ類の予測技術は産地の実測による精度向上が課題であり、かき・もも研究所及び、産地と連携し取組を進める。

(3) 「クビアカツヤカミキリ」調査地点を設定し、監視体制を構築する(那賀管内20ヶ所前後を予定)。